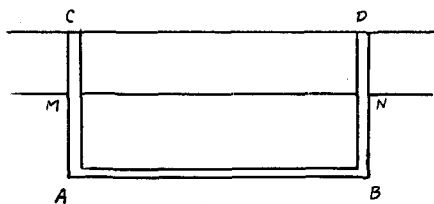


信州大学 正員・夏目正太郎

" " 石川 清志

§ 1. ま え が き

弾性地盤内に置かれた骨組構造物が強制振動させられる場合の解を求めるものである。今、面内荷重による平面的な挙動に限定しておく。弾性地盤内の棒状構造は1次元の構造物強制振動で経験した。(たゞい非減衰振動として)。こゝで2次元の挙動に応用してみるのである。左図に示すように、2本の柱が地層と貫通して底部と水平材で連結したラーメン構造である。要する性質の層状地盤は、Winklerのバネ定数の違いで区別し、地盤の運動は切り離して、こゝで入れてない。たゞし埋設構造物なる故に周囲の土圧なるものを附加質量的に考えて振動体と一体となって運動の中に取り入れる。外力は演算子法構造解析で扱う所の荷重マトリクスとして、任意の位置に作用させる。基本微分方程式は、変位に比例する反力を入れた所の弾性床土の進行のたて振動と、たゞみ振動の解を単純に組み合せて、構造物全体の振動を表示するものである。



本の柱が地層と貫通して底部と水平材で連結したラーメン構造である。要する性質の層状地盤は、Winklerのバネ定数の違いで区別し、地盤の運動は切り離して、こゝで入れてない。たゞし埋設構造物なる故に周囲の土圧なるものを附加質量的に考えて振動体と一体となって運動の中に取り入れる。外力は演算子法構造解析で扱う所の荷重マトリクスとして、任意の位置に作用させる。基本微分方程式は、変位に比例する反力を入れた所の弾性床土の進行のたて振動と、たゞみ振動の解を単純に組み合せて、構造物全体の振動を表示するものである。

§ 2. 解の演算法

(i) 棒のたて振動

$$\frac{EA}{L^2} \frac{\partial^2 u}{\partial x^2} - \frac{EA}{g} \frac{\partial^2 u}{\partial t^2} + k_u u = g_u \sin pt \quad (1)$$

$$u = u_h + u_p \quad (2)$$

この微分方程式の右辺を0と置いて得られる同次解は

$$u_h = L \cos \mu p \sin \mu p \cdot M e^{i\omega t} \quad (3)$$

で、附加質量が存在するときは質量マトリクス $C(p)$ が挿入される。故に状態量は

$$u_h = L \cos \mu p \sin \mu p \cdot C(p) M e^{i\omega t}$$

$$F_h = \frac{\mu EA}{L} L \sin \mu p \cos \mu p \cdot C(p) M e^{i\omega t} \quad (4)$$

$$\mu^2 = \left(\frac{EA p^2}{g} + k_u \right) \cdot \frac{L^2}{EA}$$

特解は外力を荷重マトリクスで加えられるので、基本的な解は同次解と同じ型としている。

$$u_p = L \cos \mu p \sin \mu p \cdot C(p) [M_p + K_p(\omega)] \sin pt$$

$$F_p = \frac{\mu EA}{L} L \sin \mu p \cos \mu p \cdot C(p) [M_p + K_p(\omega)] \sin pt \quad (5)$$

$$\mu^2 = \left(\frac{EA p^2}{g} + k_u \right) \cdot \frac{L^2}{EA}$$

となる。

(ii) 棒のたゞみ振動

$$\frac{EI}{L^2} \frac{\partial^2 w}{\partial p^2} + \frac{EA}{g} \frac{\partial^2 w}{\partial t^2} + k_w w = g_w \sin pt \quad (6)$$

$$w = w_h + w_p \quad (7)$$

同次解は2要素あつて

$$(a) w_h = L \cos \nu p \sin \nu p \cdot \text{ch} \nu p \cdot \text{sh} \nu p \cdot N e^{i\omega t} \quad (8)$$

$$\nu^4 = \left(\frac{EA \omega^2}{g} - k_w \right) \cdot \frac{L^4}{EI}$$

$$(b) w_h = L e^{-\nu p} \cos \nu p \cdot e^{-\nu p} \sin \nu p \cdot e^{i\omega t} \sin \nu p \cdot N e^{i\omega t}$$

$$\nu^4 = \frac{1}{4} (k_w - \frac{EA \omega^2}{g}) \cdot \frac{L^4}{EI} \quad (9)$$

となる。附加質量を考慮すると質量マトリクスは $C(p)_w$ が挿入される状態量は

$$W_h(p) = D R(\nu p) C_p(p) N_h e^{i\omega t} \quad (10)$$

D: 物理定数係数, R: 座標マトリクス。

特解で強制外力を荷重マトリクス $K_p(\omega)$ であらわし固有マトリクス N_p に加味することになる。

$$W_p(p) = D R(\nu p) C_p(p) [N_p + K_p(\omega)] \sin pt \quad (11)$$

で特解の状態量が得られた。ラーメン構造ではたゞみ振動とたゞみ振動と合成して6次の量になる。

§3. 固有値と固有マトリクス

ラーメン構造としての挙動は先の式であらわされるが、此の段階では一般解にすぎない。この種の微分方程式は、境界条件と初期条件を入れてはじめてそのラーメンの挙動と見ることに出来る。そこで各部材の節点においては、連続条件が成立しているの、二つの部材の始端と終端とを連続させることにより、漸次移行演算が出来る。最後の境界条件において、同次解からは固有値決定方程式を得、特解からは固有マトリクスが一義的に求められる。

(i) 同時解の移行演算

(A) M, N における移行式は $(r+1)$ 部材の $p=0$ 端と、 (r) 部材の $p=1$ 端とを連続させる。

$$W_{r+1}(0) = W_r(1);$$

$$\begin{aligned} X_{r+1} &= R_{r+1}^{-1}(0) D_{r+1}^{-1} D_r R_r(1) C_r(1) X_r = L_r X_r \\ &= L_r G_{r-1} X_r = G_r X_r \end{aligned} \quad (12)$$

これが漸化式である。

(B) A における移行式は (k) 部材の $p=0$ 端と (k) 部材の $p=0$ 端とを直角に連続させている。

$$W_k(0) = J_k W_k(0);$$

$$\begin{aligned} X_k &= R_k^{-1}(0) D_k^{-1} I_k D_k R_k(0) X_k = L_{k+1} X_k \\ &= L_{k+1} G_0 X_k = G_{k+1} X_k \quad (G_0 = E) \end{aligned} \quad (13)$$

であらわされる。

(C) B における移行式は (s) 部材の $p=0$ 端と $(s-1)$ 部材の $p=1$ 端とが直角に結びつけられている。

$$W_s(0) = J_0 W_{s-1}(1)$$

$$\begin{aligned} X_s &= R_s^{-1}(0) D_s^{-1} J_0 D_{s-1} R_{s-1}(1) X_{s-1} = L_{s-1} X_{s-1} \\ &= L_{s-1} G_{s-2} X_{s-1} = G_{s-1} X_{s-1} \end{aligned} \quad (14)$$

となる。これらで示される様に、部材中間点の移行演算は (a) 型で利用され、隅では (b), (c) 型で移行することになる。

C 点、D 点は境界条件と違ふ点で境界条件マトリクスを B_{N+1}, B_{N+1} とすれば

$$\begin{aligned} B_{N+1} X_{N+1} &= 0 \\ B_{N+1} X_{N+1} &= 0 \end{aligned} \quad (15)$$

となり、それぞれの固有マトリクスを代入すれば

$$\begin{bmatrix} B_{N+1} & G_N \\ B_{N+1} & G_N \end{bmatrix} X_1 = 0 \quad (16)$$

を得。係数行列式を 0 にする根 $W_1, W_2, \dots, W_{2m}$ が求

まる。 X_1 のうち 1 つの未定係数を Ω とおけば (16) より

$$X_1 = P(\Omega) \Omega \quad (17)$$

を得る。

(ii) 特解の移行演算

特解には荷重マトリクスがあるので $p=1$ 端の状態で連続させるときに荷重マトリクスが附加されてくるが、同次解と考え方は同じである。故に

$$X_{r+1} = G_r X_r + P_{r-1} + \langle R_r(1) \rangle \quad (18)$$

となる。境界条件とすれば

$$B G_r X_r = -B [P + R(1)] \quad (19)$$

で与えられる外力(強制力)による固有マトリクス X_{r+1} が決定される。かくして同時解と特殊解による状態量を合せて、このラーメンの状態量となる。

$$W_r(1) \frac{G_r}{\Omega} D_r R_r(1) \frac{G_r}{\Omega} P_r(1) \Omega e^{i\Omega^2} + D_r R_r(1) \frac{G_r}{\Omega} X_r + P_{r-1} + \langle R_r(1) \rangle, \quad (20)$$

と書ける。

(iii) 初期条件

2次元の挙動を示すので全体の動きを U, V とし初期条件としてこの変位と変位速度が 0 となるようにする。これらの変位を Fourier 級数で表わし、その係数を求めれば Ω と定める連立方程式を得る。

$$\begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1,2m} \\ a_{21} & a_{22} & & a_{2,2m} \\ a_{31} & & & \\ \vdots & & & \\ a_{m1} & a_{m2} & & a_{m,2m} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \Omega_1 \\ \Omega_2 \\ \vdots \\ \Omega_{2m} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_m \end{bmatrix} \quad (21)$$

ここに得られた Ω_n をもって (20) に代入すれば各点における状態量を算出出来る。

参考文献 谷本・石川 共著 複素解析と構造解析 (1971)

谷本・石川 共著 マトリクス構造解析 (1971)